1954　昭和２９年１月１日発行　　鶴研
雑誌　日本映画　１月号　６頁



# 愚問賢答・十九の扉

質問
①貴方の人気の原因
②人気をいつまでつづけられるか
③好敵手について
④ピッタリした役、
⑤今日の成功のカギ
⑥専属制の是非
⑦映画会社にいいたいこと
⑧今年やりたいしごと
⑨小説の主人公
⑩日本で好きなところ
⑪日本女性の美しいところ
⑫尊敬する芸術家
⑬朝鮮の停戦協定成立について
⑭日本のアメリカ基地について
⑮のんびりするとき
⑯行きたい国
⑰映画スタアに欠けているもの
⑱貴方は幸福ですか、
⑲なつかしい思い出

答えるひと　池部良 ＆ 鶴田浩二

**①　貴方のすばらしい人気の原因はどこにあるとおもいますか。**

池部　うまくないからじゃないですか。しろうとくさいんですよ。もっともぼく自身、俳優らしく板につきすぎるのはいやなんですが……。といって、ベテランにはなりたいんです。まあ、普通の人、っていうとへんないい方だが、俳優ではない人のような生活をしたいとねがっています。

鶴田　ぼくが答える問題ではないね。その人の価値とかニュアンスとかは相対的なもので、客観的にきめられるものでしょう。人気とは何ぞやといったら、きわめて無責任なものだとおもうんだ。人気はこの瞬間こちらをむいていても、つぎの瞬間にはくるりと後をむくかもしれない。ファンがいるということと人気があるということとは性質がちがうと思う。ファンの中にはぼくのある作品とか、あるタイプ、役柄を好きな人もきらいな人もいるとおもう。それがファンというものだとおもうんだ。人気は実体がないから逃げるんだよ。

**②　貴方は現在の人気をいつまでつずけてゆけると考えていますか。**

池部　それはほとんどわからない。自分では十年くらい保つなんて考えていても、来年になれば駄目になるかもしれませんからね。

鶴田　人間だからとても答えられない。人気を無視しているわけではないがちょっとキザないい方でいやだが、ぼくは人気のために仕事をしているんでは絶対ない、といえる。

**③　好敵手と評されている鶴田浩二氏について。**

池部　よくは知らないんです。鶴田君の映画はよくみますよ。だから、映画のうえでは、

鶴田君は鶴田君の道をいってるとおもいますが……。たいへん、ざっくばらんなひとらしいですね。一度会って、ゆっくり話をしてみたいとおもいます。

鶴田　池部君のことはあまり知らないが、なにか日本のオーソドックスな家庭でなに不自由なく順調にそだったという気がする。ぼくなどはたいへんわるいこともしてきたからねえ。恥づべき過去ではないが、家はたいして金があったわけではなし、いろいろなコースをたどったということで、池部君とはちがいますね。

**④　貴方がいままで演られた役で、いちばんピッタリしたのはなんですか。その役で、貴方自身を完全に表現したとおもいますか。**

池部　割合に、自分の映画にはどれも愛着があるんですが、「現代人」「暁の脱走」「破壊」「戦争と平和」が好きです。このなかで完全に表現したとはおもわないが、それぞれに自分があるとおもっています。割と気らくに表現しえたのは「戦争と平和」ですね。あの気ちがいの役……。自分は気ちがいみたいではないけど（笑う）。「現代人」なんかもビックリしました。結果論になりますが、よい映画の自分は、おれのものだというかんじがします。

鶴田　〝栄光への道〟（松竹。中村登・監督）というのがあったんですが、このなかの永井というプロ野球の新人の話がよかったな。とても人間性があふれていて、ぼくはわかるような気がするよ、この永井の気持は……。くそまじめな日課どほりにやる男なんだ。ふと考えても、となりやそのへんにいくらでもいそうな気がするんだな。悪い意味のケレン味がちっともない。映画でとりあげてやれるかと思ったね。好きだった。自分自身を表現したかといわれれば、したんじゃないのかな。

**⑤　貴方の場合、どこに今日の成功のカギかあったとおもいますか。**

池部　ぼくがねえ。たいして勉強もしなかったし、やっぱりさっきいったよりに、しろうと的役割をまもりつずけられたということでしょうか……。なんでもねえ、「あれは地じゃないのか」といわれたほうが、よくできたといわれるより気持いいです。

鶴田　成功とは、昔にくらべれば金銭的にも他人に苦労をかけないですむようになったからそういうことかな。僕は海軍から帰って高田オヤジ（高田浩吉氏）の劇団に入って旅まわりをやり、それから映画に入って人気が出てきたんだが、こうならなかったら、この前「文芸春秋」誌に伊豆あたりの雑魚風呂で先生の背中を流している旅役者のことがのっていたが、あるいはそうしていたかもしれない。とにかく俳優の仕事はつずけていたろう。

**⑥　専属制の是非。**

池部　条件がととのえば専属制のほうがいいが、そうでなければフリーのほうがいいでしょうね。ぼくの場合、ホームグランドがなくなるのはさみしいんですよ。腰がおちつかないんですよ。でも、現在のぼくは東宝の専属ですが、協議のうえで、松竹以外の他社に出演することもできます。

鶴田　たいへん純粋な意味ではフリーであるべきだ。いまの日本映画界のしくみでは、専属俳優だと、自分のやりたいものを他社でやれないということがあるが、不自然だ。といってそれだけでは通れない。人間である以上相互関係はさけられないからね。いい専属制がのぞましいがこういう国では無理だね。

**⑦　映画会社にいいたいこと。**

池部　いっぱいあっていいつくせないよ。ぼくの場合、バラエテイに富んだ企画がほしい。しかしそれがない不満がありますね。ドンピシャなものがあればいいんだが……。でも、せめて三本に一本ぐらいはやりたいものをやらせてもらいたいですよ。ぼくは去年九本、ことしは「坊っちゃん」まで四本出ましたが、年六本ぐらいにとどめるのが丁度いいところですね。それ以上だと、機械みたいになってしまうし、それ以下だと、こんどはいつも廻ってないと調子が出ないという結果になってしまうでしょうね。

鶴田　ぼくの場合、松竹映画がいちばん多くて、いいたいこととなれば、いきおい松竹になるな。うーん。こいつはたくさんあるから……。不合理なことだらけだよ。映画会社にはいい意味でもわるい意味でも「閥」があるんだ。しかもそれを美点であるとかんじさせるようにいいつたえられてるんだが、こんな不合理なことってないですよ。それから製作者側に割に不勉強な人が多い。プロデューサーでもアイマイで誠意のない人が多い。ことに映画会社というところにはオポチュニスト[1]が多い。幻惑されないで、いいものはいい、わるいものはわるいと弾劾できる人があれば、金をうんともってるんだから、いいものができないはずはないとおもうんだがね。

**⑧　今年どうしてもやりたい仕事。**

池部　秋に沢村投手の伝記映画。これは昭和十一、二年頃、プロ野球の名投手として活躍した人の話で、さいごは戦争に行って亡くなります。あと、参謀に扮する映画、サローヤン原作の「男」などです。ぼくの「坊っちゃん」につぐ作品は、大映で撮る「地の果てまで」という、久我美子さんといっしょの仕事です。

鶴田　たくさんあるが、なかなかできない。「日の果て」のほかに、阿部知二の「黒い影」、火野葦平の「花と龍」をやらなくちゃならない。「黒い影」は豊田四郎さんの監督。それから佐分利さん監督の「叛乱」もある。でっかいところでそのくらい。その他、商売を三本ばかりどうしてもやらなきゃ。

**⑨　やってみたい小説の主人公。**

池部　「赤と黒」（スタンダール原作）のジュリアン・ソレル。あんまり年をとらないうちにやりたいですね。四十になってジュリアン・ソリルでもないでしょうからね（笑う）。すでに撮りあげた「坊っちゃん」などもやりたかたものなんですよ。

鶴田　さいさんの小説、あんまり面白いのがないな。「オール読物」三月号に南條範男という人が書いた「子守の殿」というのがあったが、あれは面白かったな。それから「黒

---

1　日和見(ひよりみ)主義者。御都合主義者。

い影」ね。これはいいんだ「小島の春」みたいなハンセン病（旧名を管理人が変換）患者の話なんだが、あれはやりたい。

**⑩　日本でいちばん好きなところ。**

池部　九州ですね。このあいだ二週間ばかり旅行したんですが、なんかのびのびしていて、人も気候も暖かくていいですね。気がらくでいい。

鶴田　好きというのは魅力ということだね。それなら……（考え込む）京都か東京だな。

**⑪　日本女性の最も美しいところ。**

池部　いちばん簡単な服装がいいですね。だからぼくは夏の服装が好きです。パリ直輸入は感心しない。和服も洋服も好きですよ。簡単なものなら。

鶴田　「日本の貞操」を読んだんだけど、そういう種類の、関係ないことでハッと目にとまる度合の強いシチュエーションにぶつかる、どうも同情できないんだな。ふと了解にくるしむことがあるんだ。この頃の女のひと勇敢になったし ―― それはいいんだが ―― 求められれば強い美しさがほしいですね。

**⑫　尊敬する芸術家。**

池部　どうもみんなえらくみえて（笑う）。志賀先生（直哉）は好きだ。監督では渋谷さん（実）が好き。これは尊敬ということばには当てはまらないけど。

鶴田　無条件で二人はいるんですよ。大曾根辰夫という監督と高田浩吉という人と。それから割に筈見恒夫さんなんか好きだな。三度ぐらいしかあったことないけど、あの人の批評態度とか人柄が好きなんだよ。

**⑬　朝鮮の停戦協定成立についての感想。**

池部　ひとまず軽い平和がきたという点でいいとはおもいますが、結果はおなじなんですね。これから先、またながく冷戦がつずくとおもうと、かえってこれがいいのか、わるいのか……。軽い平和がきたという点では、安ど感がありますけど。

鶴田　よかったとは思わないですね。大ぜいの人がそのために犠牲になるんだから、国連軍も中共軍も責任をとらなきゃいけない。韓国の女学生がデモった気持はわかる気がする。日本ではいまだに原憬で死んでいく人がいるって、新聞に書いてあったけど、なんか、実に不愉快なんだ。戦争のあとにあるそういう現実にたいして同情したい気持ちだ。

**⑭　日本にアメリカの基地が七百もあるのをどう考えますか。**

池部　アメリカ軍が日本にいるあいだは、追っても追ってもやってくる蝿のようにいつまでもいろんな問題がおこっておなじですね。よほど大きな政治的なものがないかぎり……。政治家たのむゼ……だな。

鶴田　行政長官の怠まんだと思う。独立だといっても実際は占領独立で、独立してないで

すよ。内灘にしても、その他の基地の近くの農家はすべてパンパン宿になって、日本的なものがどんどんこわされていくなんてたまらないだろう。しかし、ちいさい抵抗で大きな力にぶつかるのはむづかしいね。希望としては即時てっ退してもらいたい。「日本の貞操」はたくさんだといいたい。といって、いまの政治状態じゃ不可能だが、もっとよい状態ができないことはないと思うんだ。努力することだ。

**⑮　貴方がのんびりするのはどういうときですか。**

池部　乗物にのっているとき。これは、なにも考えないから。自宅から撮影所へ行くときの車の中、ロケーションの汽車のなかなど。

鶴田　弟とあそんでるときだな。ぼくは機械を作るのが好きで、二人でよくラジオを作るんだがね。しかし、なかなか忙しくてヒマがない。

**⑯　行ってみたい外国とその理由。**

池部　あまり行きたくないな。みんなが行ってきて、いろいろと見たことをおしえてくれるから、どっちでもよくなった。

鶴田　フランスもちょっと行ってみたいな。概して欧州に行きたい。アメリカは無理して行くことないよ。銀座のアメリカナイズされたのをみれば、想像がつくもの（笑う）。

**⑰　日本の映画スタアに缺けているものはなんですか。**

池部　おたがいの友情はもちろんあるんだけど、仕事以外の面でも、もっとつながりがなければいけないとおもうよ。これには、やむをえない事情もたくさんあるのだけれど、やっぱり欠けた点ですね。

鶴田　概して不勉強だとおもう。ぼくもふくめてですよ。撮影で身体全体が写るときと写らないときがあるが、カット、カットによって妥協があるんですよ。演技力、創造力、感受力という俳優としての最低條件をなんにも知らない人がおおい。

**⑱　貴方は現在幸福ですか。**

池部　不幸じゃないですね。むしろたいへんしあわせかもしれない……。

鶴田　幸福だということなんでしょうね。ぼくはこの頃すなおに肯定すするようになったんですよ。常識的な意味の幸福なんだ。人間性云々となるとむづかしい。

**⑲　最もなつかしい思い出。**

池部　東宝撮影所を入っていくと芝生があるでしょう。あそこがまえはとってもきれいで、いまみたいに汚なくなかったんですが、ぼくがはじめて「闘魚」という映画（昭和十七年）に出ていたときに、まだ知ってる人ができないんで、たいくつなときはあそこでひとり寝そべっていた。晴れた七月の夕方なんかとてもよかった。その頃のことがなつかしいですね。

鶴田　高田先生の劇団に入って、九州や四国などを巡業したとき、とっても金がなくて、

十円の焼いもを二人でくったことなんかわすれられないな。そのときの友人といまでもときどき手紙のやりとりをしてるがね。それからはじめて舞台に出してもらったとき。このときは喜劇で、とんでもない三枚目をやったのだがこれもつよくのこってる。

## あとがき

鶴田浩二

じつは、ぼくは、中学三年生のころ、池部君のはじめての映画「闘魚」をみて、池部君のファンになった。あの映画の池部君から、ぼくはひじょうに鮮烈な印象をうけた。月田一郎や里見藍子も出演していたが、これには全く感心しなかった。池部君だけがつよくせまってきて、いまでもわすれられないくらいだ。池部君の「暁の脱走」や「戦争と平和」をその後にみたが、ぼくとしては、「闘魚」の池部君にはおよばない気がした……。池部君の映画のなかでは、「闘魚」がいちばんだ。

日本の映画俳優についていえば学校を出て間もない人がよく撮影所へはいってきて、これはしろうとだからというので、監督のいうなりに、あっちへいったり、こっちへいったりして、なんとかできあがってしまう。それで、新人に似合わぬなんとかかんとかといって、認めてしまう。それが二、三本つずくとアクターになってしまう。これでは、置いてゆかれるのも当りまえだとおもう。この頃、新劇の人が映画に進出する機会が多くなったが、この人たちはりっぱだ。舞台では、幕があけばおりるまでやり通さなければならないのだから、妥協がない。ぼくは、〝雲ながるる果てに〟で、映画俳優の不勉強さを再認識した。妥協はこわい。たとえアップでも、足の先まで芝居をしなければならないのだ。このことはむづかしく、くるしい。しかし、自分は自分で人間としての能力をたかめる努力をしなければならないとおもっている。